Sophocles, Ajax 1373(1)

安西眞

アイアスの死体をめぐるギリシア軍全体の対応をどうするかが、ソフォクレス『アイアス』の後半部の展開の軸となっている。その対応をめぐる争いに決着をつけるのが、アガメムノンの、下に引いた台詞である。

簡単に、状況を説明しておく。アイアスの死体を名誉ある形で葬ろうという決意 を表明し、それを推進しようとするのは、アイアスの母違いの弟で、部下でもあっ たテウクロス。だが、メネラオスとアガメムノンが次々に登場し、この死体を軍に おける反乱者すなわち敵として処理するよう(鳥たちの餌-1165)命じる。非勢な がら、軍の指揮者たちと対峙しつづけるテウクロスだが、最後に現れた味方が、オ デュッセウスである。彼は、トロイアを前にしたギリシア軍の最高指導者であるア ガメムノンを、引用文にみられるように、最後にはなんとか説得する。アイアスは、 確かに自殺に至る最後の一連の行動に関する限り、ギリシア軍の敵であったし、特 に自分の直接の敵対者であった。だが、その自殺した死体を、軍として葬る(つま り味方として)か、鳥どもの餌になすべく(つまり敵として)放置するか、という問 題になれば、指揮にあたる者としてその敵味方認定基準はおのずから異なるべきだ、 というのが、オデュッセウスの説得の論理の大枠と言ってよいであろう。ふたりの 争いは、長い台詞を含んだ不規則な行数による言い争い (1318-1345) から、一行対 応 (スティコミュティア、1346-1369) へ、という悲劇の言い争いの場面で通常とら れる形で進行するが、その最後を締めくくるのが、このアガメムノンの台詞なので ある。

⁽¹⁾ 本稿は、2002 年 6 月 21 日、W. Burkert チューリヒ大学名誉教授が北海道大学文 学研究科において行った講演の際に、同じ会において読まれた本稿と同名の研究発 表をもとに成立している(研究会の名称:北海道大学文学研究科主催シンポジウム 「古代の宗教を照らす」)。ちなみに、その会で Burkert 氏が読んだのは、"Problems of Animal Sacrifice: 'Homo Necans' Revisited" であった。その他、筆者のものと、 納富信留慶応大学助教授による「クセノパネスは如何に語ったか」と、佐藤知己北 海道大学助教授による「口承文学に見られるアイヌの信仰」とが読まれた。それぞ れ、Burkert 氏の専門に比較的近いことがらに関係する内容のものであったことは、 題名からも理解していただけるであろう。同研究会は、「フィロロギカ」臨時研究会 として、北海道大学文学研究科の支援のもとに行われたこと、司会その他で、葛西 康徳氏 (新潟大学教授)、大芝芳弘氏 (都立大学 [現首都大学東京]教授)も、ご参加 下さり、議論を盛り上げてくださったことを記し、感謝したい。本稿筆者の発表に 対しては、佐野好則都立大学助教授(現国際基督教大学助教授)から、発表後会場で、 詳しいご批評をいただいた。発表原稿は大幅に書き直されているが、議論の対象と なっているアガメムノンの発言がなされた文脈を比較的詳しく書き込んだのは、同 氏のご批判をうけいれた結果であることをここに感謝とともに記しておきたい。北 海道大学文学研究科にとっても「フィロロギカ」にとっても何らかの形で記録にと どめておくべき会がかつて持たれたということを、このような形で記録できること は、筆者の喜びとするところである。

Αγ. ἀλλ' εὖ γε μέντοι τοῦτ' ἐπίστασ', ὡς ἐγὼ σοὶ μὲν νέμοιμ' ἄν τῆσδε καὶ μείζω χάριν, οὖτος δὲ κἀκεῖ κἀνθάδ' ὢν ἔμοιγ' ὁμῶς ἔχθιστος ἔσται. σοὶ δὲ δρᾶν ἔξεσθ' ἃ χρή.

1373 χρῆς Dindorf

「しようがないな。ただ、このことだけは知っておけよ。おれは、おまえになら、これも、そしてこれよりもまだ大きな報酬も支払ってやろうとも思うが、あいつは、おれには、あの世にいようと、この世にいようと、とうてい受け入れ難い敵なのだ、ということをな。おまえは、せねばならぬことを、すればいいだろう。」

上の本文は、小さな改定を除けば^(α)、中世写本の伝えるままを印刷している。校訂注に示されているように、19世紀に Dindorf が、χρή を χρῆς (おまえが欲する)と読み替えるように提案した。この読み替え提案が、最近 100 年あまり、ほぼ一貫して主要校訂本に採用されている (後述参照)。その読み替えに、解釈上の意図があるとすれば、ここに示されたアガメムノンの台詞の根底には、オデュッセウスへの好意(もちろんアイアスへの敵意に対する対照の形で)の表明がある、という読み方をするべきだ、ということではないかと思われる。しかし、それは悪しき判断であって、中世写本の伝える読みに戻すべきである、という主張をすることが本稿の目的である。

Dindorf の読み替え提案は、Thesaurus Linguae Graecae VIII-1649 (1865) に見ることができる。この S. Aj. 1373 だけに該当する彼の判断を取り出す形で説明する。1 中世写本が一致してここで伝えている読み $(\chi \rho \acute{\eta})$ は適当でない (inepte)。2 $\chi \rho \acute{\eta}_S$ は Ant. 887 へのスコリアや、Suidas を典拠とする限り、 $\chi \rho \acute{\eta} \acute{\zeta} \epsilon_{\rm LS}$ または、 $\theta \acute{\epsilon} \lambda \epsilon_{\rm LS}$ の意味で使用可能であったし、また、ここでは、オデュッセウスの欲していることという形で死体の埋葬を指示したほうが適当である。もちろん、両者 $(\chi \rho \acute{\eta} / \chi \rho \acute{\eta}_S)$ が視覚上非常に近いということがこの提案の前提であることは言うまでもない。下書きのイオタは、中世写本では極めて不安定な伝わり方をしていた、という事実を考えれば、両者は実際にはもっと近い、とも言いうる。

以降、彼の見解は、少なくともこの箇所に関する限り非常な説得力を持ちつづけた。『アイアス』を含む、この提案以降に出版された、ap.cr. を備えた主要校訂本は、Campbell (1881), Jebb (1896), Pearson (1924), Dain (1958), Dawe (1975), Lloyd-Jones と Wilson (1990) による 6 種® であるが、Dain を除く 5 種は、中世写本の伝える読みを不適当であると判断している。その中でも、Campbell を除く

⁽²⁾ いくつかの写本で ὅμως というアクセントが打たれている。

⁽³⁾ L. Campbell, Sophocles, Plays and Fragments vol.2 Oxford 1881, R. Jebb, Sophocles, the Plays and Fragments vol. 7 Cambridge 1896, A. Pearson, Sophoclis Fabulae Oxford 1924, A. Dain, Sophocle vol.2 Paris 1958, R. Dawe, Sophocles Tragoediae vol.1 Leipzig 1975, H. Lloyd-Jones et N. Wilson, Sophoclis Fabulae Oxford 1990. なお、注7も参照.

(後述参照) 4種は、Dindorf の名を ap.cr. に掲げた上でその読み替え提案を本文に 印字している。Dain は、上に本稿が提示したとおりの本文を印刷し、Dindorf の 名をどこにも出していない。何らかの意図がそうすることにあったのかも知れないが、彼の処置は無視された、と言ってよい。特に、Dawe による校訂版の同箇所の ap.cr には、Dindorf の名が corr(exit) とともに記されている。誰かが何か重要なことを言わないかぎり、この傾向は今後も長く続くであろうことは、容易に予想できる。

ここの読みに関する判断の核心は、文脈上、 $\chi p \acute{\eta}$ が inepte (不適当な)な言葉であるかどうか、という点にかかっている。 $\delta p \hat{\alpha} \nu \ddot{\alpha} \chi p \acute{\eta}$ (1373)が、アイアスの埋葬を実際には意味していることは誰の目にも明らかなことであろう。そのことに関する念押しの意味もあって、この台詞に至る状況をやや念入りすぎるかも知れないほどに説明しておいた。

そして、説明したごとくに、オデュッセウスは、その埋葬の必要性をアガメムノンを相手に説得してきたのである。だから、その埋葬を、「(おまえにとっての)当為ないしは義務 (lpha $\chi
ho \eta$)」と表現すべきではなくて、「おまえの欲していること (lpha $\chi
ho \eta$)」と表現したほうがはるかに適当なことである、というのが、Dindorf 以降の校訂者たちのほぼ一致した見解ということであるだろう。そしてそれは表面的には説得的な判断でもあるように思われる。

しかし、それは、 $\chi p \acute{\eta}$ をいったん現代語(「…ねばならぬ」、must, should, is necessary etc.) に置き換えた上での判断に対して言いうることであって、 $\chi p \acute{\eta}$ の持つ前5世紀的な意味に私たちがもう少し接近をした上でそうすればそういうことにはならないのではないだろうか。

まず、私たちは、Barrett が明らかにしてくれた $\chi \rho \acute{\eta}$ という語彙の使用分布に関する特異な現象を思い出すべきだろう。彼は、E. Hipp. 4 を伝えるふたつの伝承 ($\chi \rho \acute{\eta}$ L-P: $\delta \epsilon \hat{\iota}$ cett.) があることに関して、そこでは、L-P の伝える $\chi \rho \acute{\eta}$ を採用すべきだと断言している。そして、ついでに、 $\chi \rho \acute{\eta}$ というギリシア語について大変重要な事実を指摘している。すなわち、1 この語は、確かに「…ねばならぬ」であるが、「…」に補わなければならない行為や判断は、多く morality とか、divine order とかといった key-word でくくれるものであり、 2 また、この語は、前 4 世紀以降、急激に $\delta \epsilon \acute{\iota}$ にとってかわられる場合が多くなる、という 2 点である。

ひとつの語の、ひとつの作品のひとつの箇所での伝承をめぐる問題に関しての文章にすればいくらか大袈裟すぎるかもしれないことを、簡略に指摘したい。大袈裟かも知れないが、しかし、いくつかの悲劇本文の箇所に見られる χρή > χρῆς あるいは文脈によれば χρή > χρῆ という読み替え提案は結局その「大袈裟なこと」に響いて来ざるをえない、という見通しが筆者にあるからそうするのだ、と理解して欲しい⁽⁴⁾。

第一に、ギリシア悲劇は、それを上演すべく運営し、またそれを享受すべく運営 したポリス・アテナイという共同体と密接に関わるものであるという前提のもとで

⁽⁴⁾ 例えば、Soph. については、F. Ellendt, *Lexicon Sophocleum*, Berlin 1872 s.v. $\chi p \acute{\eta}$ を見れば、近代の校訂者たちの処置がどんなにこの $\chi p \acute{\eta}$ という語を S. の本文から見えにくくしているか、よくわかるだろう。

読み解かれねばならない、という主張が最近頻繁になされている。いわゆる、ギリシア悲劇=共同体言説行為論である。これだけで悲劇というテクスト群を断じようとするのは明らかに単純すぎることだが、そのことにさえ注意すれば、方向そのものは極めてまっとうな主張であると、私は考えている。第二に、これと関連してアテナイが祭政一致の社会であったという事実がある。第三に、ギリシア悲劇が前4世紀にはいって急激に創作力を失ったという、誰もが嘆く現実がある。第三の事実は、第一、第二と切っても切れない関係にあるだろう。ギリシア悲劇の没落には、それに関わった詩人たちの資質などというものとは無関係な部分もある。ギリシア悲劇を支えたポリス・アテナイという社会の構造の変質と連動した歴史的な現象としてギリシア悲劇の没落が起きた部分もある、と私は思うのである。χρήの使用の激減は、そういった歴史的な事実と連動しているのではないか。少なくとも、歴史的には、期を一にしている。

つまり、χρή という語は、古典期 (前5世紀)アテナイ市民の社会生活、政治行動、個人としての生活の核心とあまりにも密着しすぎた語になってしまったので、そのひとつの社会が変質してしまうと、使用することができない語になってしまったのではないか。あまりにもひとつの時代の中心と深い関係を持ってしまった語彙は、その時代の終わりとともに使用そのものが困難になってしまうという事情は、近代人である我々はいやというほど見て来たはずだ。ここでは、ちょっと大袈裟に過ぎると叱られてしまうようなことを書いてしまったが、最初に、χρή > χρῆs の読み替えに感じた私の疑問の一部は上に書いたようなことでもあったので、記した。

純粋に本文批判的な水準では、ことははるかに簡単である。すでに記したように、Campbell は、続く 4 人の英国人校訂者とは違う対応をしている。彼は、 $\chi \rho \eta$ に crux を付けて本文に印刷し、 $\chi \rho \eta \tilde{\eta} \tilde{s}$ を印刷していない。そして、注では、 $\chi \rho \eta$ は、not inexpressive, possibly right であると記している。彼が感じた本文批判上の躊躇は正しいところをついていたと私は思う。ただ、not inexpressive, possibly right と判断しながら、 $\chi \rho \eta$ をそのまま印刷してもよいかもしれない根拠として彼があげた平行例ないしは参照例は、彼自身を説得できなかったように、彼以降の校訂者たちを説得できなかった。彼があげたのは、S. El. 606 である \tilde{s} :

Ελ. τοῦδέ γ' οὕνεκα

κήρυσσέ μ' εἰς ἄπαντας, εἴτε χρὴ κακήν, εἴτε στόμαργον, εἴτ' ἀναιδείας πλέαν

606 χρῆς Wunder

「・・・・そのことに関してなら、

誰にでも行って告げるがいい。必要なら、私を悪い女だと言えばいいし、 また、口汚いとでも、恥じ知らずとでも言えばいい。」

ここの χρή についても、Dindorf 以降の、19-20 世紀の校訂者たちは、Aj. 1373 と全く同じ対応をしている。ただ一点、読み替えを最初に提案したのが、Dindorf ではない点が異なるだけだ。

⁽⁵⁾ S. El. 606 でも Campbell は χρή に crux を付けて印刷している。

Campbell の平行例は効を奏さなかった。その理由は明らかであるように思われる。 $\chi \rho \eta$ は、上に記したように、古典期のポリス社会の人間の祭政一致的な水準での行動上の「しばり」(あまり適語とは思えないが、仮に、共同体構成員が共有する社会的・宗教的な行動を判断する際の規範意識を本稿ではこう表現することにする)を根本的には、あるいは社会的に最も重大な場面では、指していると私は判断している。しかし S. $El.\ 606$ の $\chi \rho \eta$ は、その「しばり」の根源的な場所とはとうてい言えそうでない場所で使われている。幾重にも屈折した説明が恐らくその使用については、弁護として(もし、ここで $\chi \rho \eta$ を読むべきだ、と主張しようとすれば)必要であろう。ここでも写本の読みを回復すべきだ、と私は信じるが、回復するなら、 $Aj.\ 1373$ を先にすべきだろう。なぜなら、こちらの方がごく根っこにあたるところで使われているので、回復は簡単だからだ。根っこの部分が回復されれば、自然に枝葉の部分の回復もされるというものである。

χρή がひとびとの宗教的行動に関する「しばり」を表現していると思われる例は、つまり、*Aj.* 1373 の χρή の平行例となるべきは、以下のごとくであるべきだろう (訳は、それひとつで決定的だと思われる最初の例にだけ付す):

S. Ant. 245-7

Αγγ. Καὶ δὴ λέγω σοι· τὸν νεκρόν τις ἀρτίως θάψας βέβηκε κἀπὶ χρωτὶ διψίαν κόνιν παλύνας κάφαγιστεύσας ἃ χρή.

「あなたに言います。言いますよ。死体を、だれかが、いましがた、埋め、皮膚の上には、乾いた土をふりかけ、しかるべき、きよめのことをしたうえで、去ったというあとがあります」

E. *El.* 1140-1

Ελ. μή σ' αἰθαλώση πολύκαπνον στέγος πέπλους. θύσεις γὰρ οἶα χρή σε δαίμοσιν θύη.

E. IA 721

Αγ. θύσας γε θύμαθ' άμε χρη θύσαι θεοίς.

さしあたり、その文脈中に使われた他の語彙から見て、ギリシア悲劇の同時代人たちの宗教的な行動に際する「しばり」を意味するものであることが明らかな、上のようないくつかの $\chi \rho \acute{\eta}$ を引けば十分だろう。あるいは、もっと簡単に言ってしまえば、Campbell が、Aj. 1373 の $\chi \rho \acute{\eta}$ を弁護し、平行例として同じく「人は人をしかるべく埋葬せねばならない」という原則の上に立つ $\chi \rho \acute{\eta}$ - 表現(例えば上に引用した Soph. Ant. 245-7)を引いた上で、Aj. 1373 本文に $\chi \rho \acute{\eta}$ を印刷してさえいれば、それ以後の校訂者たちも、彼に従ったに違いない、とも思える。このふたつの例から、同胞とみなす者の死体を鳥や犬 (や恐らく敵たち)による辱めから守る為に、埋葬しなければならないということ $(mos, \chi \rho \acute{\eta})$ 、そして、その為のなすべき行為がひと

つの行為一覧® (â χρή) として確立していたこと、あとの2例からは、神々にささげものをするべきこと、そしてその儀式的行為には、これも行為一覧が確立していたことを推定しても行き過ぎではあるまい。むろん、これらの例を使わなくとも、それぐらいのことはどこからでも確言できるのだが。そして、 θ 0 σ αι å χρή (神々に捧げるべきものを、しかるべき手続きでささげる)とか、 δ ρ $\hat{\alpha}$ ν å χρή (宗教的行為をしかるべき式次第を満足させつつしかるべくとりおこなう)とか $\hat{\epsilon}$ φαγιστ $\hat{\epsilon}$ 0 σ αι å χρή (死体に対してなすべききよめの行為をしかるべくとりおこなう)とかという、宗教的な意味合いの強い、あるいは祭政一致的な意味合いの強い行為を表現するのに、当時のアテナイに、宗教行為を表す動詞 + å χρή で、「しかるべく…する」という、簡略化した多かれ少なかれ慣用的な一連の表現が成立していたことをこれらの例から推定しても過つことはないだろう $\hat{\alpha}$ 0

アガメムノンは、指揮系統が乱されたことに対して、指揮をとる者が感じる不快感から、アイアスの死体に対する処置を決めようとしている。これに対してオデュッセウスは、もう一歩下がって、さらに広い視点から、すなわちオリエント系非ギリ

⁽⁶⁾ 行為一覧という複数の行為を推定させる用語を使ったのは、この種の慣用的に見える表現では、複数形が使われることがほとんどだからである。そして、言うまでもなく、こういった宗教的な儀式は複数の行為からなっている。

⁽⁷⁾ 同じくアイアスの死体を埋葬するという行為を、この論争の直後に、オデュッセウスがテウクロスに、同じく χ pń を使って、しかし極端には短縮しない形で表現している:ὅσων (= α) χ pň τοῖs ἀρίστοις ἀνδράσιν πονεῖν μ pροτούς. 「人間なら、良きひとに対して当然せねばならないことども」(1379-80)。この例もまた、アイアスの死体を埋葬するという行為に対して μ pň の語が使われることの正しさを証しているだろう。なお、 μ pcr. を含まないので、Dindorf 以降の校訂本の中に勘定しなかったが、Stanford、 μ pix、London 1963 は、まさしくこの例を引いて写本の読みを弁護し、印刷している。なぜ、校訂者たちが Stanford の見解に耳を貸さなかったのか?何らかの根拠があって、1379-80 を平行例としては認定しなかったのであろうが、これ以上ここでは踏み込まない。想像をもとにした議論になりかねないからである。ただ、少なくとも、Stanford の処置が正面からの議論という形をしていないことは確かである。

⁽⁸⁾ S. Ant. 247 で読み替えが提案されていないのは、ここでは、そういう行為をした者が正体の分らない人物 (τις) だからであり、その人物の意志 (埋葬的行為を欲するか否か)は、文脈上想定することが唐突だからであろう。

シア語民族 (barbaroi) であるトロイア人を前にして戦争をしているギリシア人、つまり悲劇作者たちが使った語彙に従えば、θῦσαι ἄ χρή、δρᾶν ἃ χρή を共有する人間たちを指揮しているのだ、という視点から判断せよ、と迫ったというのが、ふたりの言い争いの根本的な構造であろう。

アガメムノンは、実は、最初のオデュッセウスの「演説」(1332-45) を聞いた時点で相手の論理にほとんど説得されてしまっていたのだ: τόν τοι τύραννον εὐσεβεῖν οὐ ῥάδιον 「いやまったく、王にとって神の秩序に従うのは容易ではないな」(1350)。ひとつの共同体の支配者は、当の共同体を支えている社会の論理に従わざるをえない。アイアスがやったことをどれほど個人的には苦々しく思っていても、である。アガメムノンはオデュッセウスの論理に屈服しなければならないことを、論争のはじめから覚悟していたということをこの発言は示している。

なぜか?オデュッセウスは、個人としての一時の感情ではなく、彼ら(この彼らを特定することはここでは試みない。とりあえずは、ここで議論しているふたりが属している社会の人間たち)が共有していたはずの社会行動上の原理あるいは規範に従えという、正気の人間なら抗うことの出来ない説得の論理をここで駆使しているからだ。アガメムノンのオデュッセウスに対する抵抗はもともと勝ち目のない議論なのである。アガメムノンがオデュッセウスの説得すること(アイアスの死体の正当な埋葬)を、ä χρή 「(人間ならば)せねばならないこと」と自ら規定したうえで、屈服する(1373)のはある意味では、論争が始まった時点で決まっていたことを確認したにすぎないともいえるだろう。

Dindorf 以来採用されてきた読み替えは、アガメムノンの屈服を、オデュッセウスに対する単なる好意の付与を意味するものだと®、読ませかねないものであり、そういう意味で二人の論争の枠組みを見えにくくしかねないものである。そして、先の「大袈裟な」指摘をもう一度繰り返せば、ギリシア悲劇をより正確に時代に即して読むことを可能にするてがかりを、私たちの目から隠しかねないものなのである。

(北海道大学)

⁽⁹⁾ もちろんそういう含みも明かにある。1371 参照。だから、本稿の主張は、好意の付与だけだと読めば、大事な点を見逃すことになる、という主張になろうか。